

The Hunted における「子供」の諸相 ——「子供」と「子供」像の関係性について——

半田 涼太

はじめに

Keywords for Children's Literature (2011年刊) という書物がある。書名から推察されるとおり、同書は児童文学において重要と思われる諸々の用語を取り上げて、それらの用語について解説を行っている本である。全部で四十九個の用語が取り上げられており、その中の一つに“Childhood”という項目がある。項目によってそれぞれ執筆者が異なっており、同項目は Karen Sánchez-Eppler が執筆を担当している。その中で Sánchez-Eppler は次のように記している。なお、次の引用箇所に出てくる“Phillips”とは、直前で言及されている Adam Phillips のことである。“Ever since Philippe Ariès’s (1962) provocative assertion that “in medieval society the idea of childhood did not exist,” historians of childhood, scholars of children’s literature, even psychoanalysts like Phillips, have striven to dismantle the essentialism of childhood” (35). 各学問分野で「子供期 (childhood)」をめぐって可能な限り本質主義が避けられてきたという状況が述べられている。同項目では、ほぼ全体を通して構築主義の観点から「子供期」という語を解説している。しかしその中で、Sánchez-Eppler は部分的に本質主義の立場を採用していることを表明している。Sánchez-Eppler は後の箇所で次のように書いている。“The need for care is indeed a natural and essential aspect of children’s lives, [...]” (36). ここでは本質主義に立脚していることを意識的に提示している。しかし、Sánchez-Eppler が本質主義に依拠していることが、当人が意図せずに表明されているように思われる記述が見受けられる。それは、二つ前の引用箇所、つまり各学問分野において本質主義が避けられてきたということ述べた直後のことだ。Sánchez-Eppler は二つ前の引用箇所に続けて次のように書いている。“These accounts stress the complicated relations, and often glaring contradictions, between any society’s idea of childhood and the lived experience of actual children” (35). ここで問題となるのは“actual children”という表現だ。ここでは「子供」の存在が無条件に前提化されており、「子供期の観念 (idea of childhood)」と対立させる形で「子供」という在り方が本質化されている。同項目においてほぼ全

体を通して構築主義の観点から「子供期」という語が解説される中で、この“actual children”という表現には違和感を覚えざるを得ない。この引用箇所直後で、「子供」の存在が前提化されることによって生じる不都合の一種が顕在化する。上記の引用箇所に続けて、Sanchez-Eppler は次のように書いている。“They offer persuasive evidence both of how attitudes toward childhood have changed over time and place, and of how much the content and duration of this life stage has differed even for children in the same society but of different genders, races, or class positions” (35). この引用箇所の中で注目したいのは後半部分だ。ここでまず Sanchez-Eppler は「子供期」のことを「この人生段階 (this life stage)」と言い換えている。そしてその後で「子供達にとって (for children)」という言い方をしており、ここでも「子供」の存在が前提化されている。この箇所は明らかに循環論法になっている。「この人生段階」というものが特定の人々を「子供」として定義づけることの理論的な根拠となるはずであるが、「子供」という在り方がそれ以前に既に前提化されてしまっている。ここから明らかになることが少なくとも二つある。一つは、特定の事柄を或る概念によって——ここでは特定の人々を「子供」として——出現させないことには、それについて語ることは困難である、ということだ。もう一つは、「子供」という概念が残存するその頑強さである。先述の“actual children”という表現の使用を含めて、これらの箇所では Sanchez-Eppler が意図せずに「子供」を人間の特定の本質的な状態として想定し、その存在を前提化している様子が浮き彫りとなっている。「子供」という概念への無意識的な依拠とそれによって証し立てられる「子供」という概念の頑強さは、上述のような論理的な混乱をもたらすだけでなく、場合によっては或る種の悲劇をもたらしもする。同様の論理的な混乱は児童文学論等の「子供」をめぐる論考の中でしばしば見受けられるが、本論文では或る一つの児童文学作品を分析することによって、このような論理的な混乱とそれによってもたらされる悲劇の一例を提示する。

Alex Shearer (1949年生) によって書かれた *The Hunted* (2005年刊) という作品がある。この作品で語られている世界には、「抗老化薬 (Anti-Ageing pill)」と「PP インプラント (PP implant)」という医療技術がある。「抗老化薬」とは、老化を抑制して寿命を延ばす薬で、四十歳近くになると政府から無料で支給される。人々が抗老化薬を使用し始めると、赤ん坊ができにくくなった。人類の繁殖能力が弱まってしまったのである。この不妊の原因はウイルスにあるようだが、抗老化薬と因果関係があるかのように言及されることもある。この不妊の蔓延は抗老化薬によって寿命を延ばした罰だ、と語り手や作中人物が一度ならず口にするのである。この不妊の真の原因は、作中で——おそらくは意図的に——不明確なままだ。その原因が何であるにせ

よ、社会に広まった不妊のために、子供の数が非常に少なくなってしまった。そのため、子供が貴重な存在となっている。「PP インプラント」とは手術によって体内に埋め込むもので、この手術を受けると肉体の成長が止まり、生涯子供の姿のままとなる。抗老化薬と異なり、この手術は違法とされている。ちなみに、「PP」とは「Peter Pan」の略語のようだ。確かに Peter Pan も大人になることがない。しかしながら、幾つかの由来が提示されて一つに特定されないため、その由来は明確にならない。

子供は貴重な存在であるため、さまざまな方法で収入を得ることができる。子供との交流を欲する人に有料で貸し出したり、歌ったり踊ったりする様子を人々に有料で見せたり、と。さらに、子供を誘拐して売り払う人もいる。誘拐は当然違法な行為であるが、高い収入を得ることができるため、人攫いはいなくなる。そのため、子供は常に誘拐される危険に曝されている。また、先に述べたように PP になる手術も違法であるが、子供で居続ければ稼ぐことができるため、この手術を受ける人もいなくなる。手術をすることは違法であるが、PP であることは違法ではないようだ。

子供である Tarrin は、大人である Deet と共に簡易宿泊施設を転々とする生活を送っている。Tarrin と Deet は親子でもなければ兄弟でもない。おそらく親戚でさえない。Deet によれば、カード・ゲームの賭けで勝って Tarrin を手に入れたという。当時 Tarrin は幼く、その時のことを覚えていない。それが本当のことであるのか、Tarrin は何度も Deet に問い質すが、Deet はその度に同じ答えを返す。

Tarrin は、一時間当たり幾らという取り決めで、子供との交流を欲している人々に貸し出されている。Deet が、顧客から注文を取ったり代金を受け取ったりという、いわば事務的なことを行う。Deet はそれだけでなく、Tarrin に教育を受けさせたり、Tarrin の体調管理を行ったり、Tarrin に顧客が望むことを教えたりもする。しかしそれはおそらく、Tarrin に愛情を持っているためというよりも、彼をきちんとした商品に仕立て上げるためであるようだ。Tarrin を貸し出すことによって得た収入が、Tarrin と Deet の生活費となり、また Deet の娯楽費となっているのである。二人はこのようにして日々を送っている。しかし、いつまでもこのままでいることはできない。なぜならば、Tarrin もやがては大人になるからだ。そこで、Deet は Tarrin に PP になることを要求する。しかし、Tarrin は生涯子供のままでいることに嫌悪感を抱く。Tarrin は思う、成長して大人になりたい、と――。

この作品について、Kimberley Reynolds が *Children's Literature: A Very Short Introduction* で次のように述べている。なお、以下の引用部分にある「キリスト教が提示する未来像 (the Christian visions of the future)」とは死後の生のこと、換言すれば彼岸のことである。

The Hunted includes no references to an afterlife, and none of the characters regrets its absence: those for whom death is finally on the horizon are ready to be done with existence. As science brings the age-old dream of 'eternal youth' into the realms of possibility, *The Hunted* urges readers to think about the relationships between death, age, and eternity in ways that are provocative, and which demonstrate how far contemporary children's literature has departed from the Christian visions of the future that shaped it for nearly three centuries. (102-103)

しかしながら、*The Hunted* は Reynolds が述べていないようなことをも示す。同作品は、子供の数の極端な減少や PP という特異な設定があるために、「子供」に対する人々の見方や態度、考え方といったことについて考えるきっかけになる作品となっている。

ところで、同作品には、設定が十分に練られていないように思われる部分や、整合性に難があるように思われる部分がある。先に言及した PP の違法性もその一つであり、この後にも幾つか指摘するが、本論文ではそのような点については深く追及せずに指摘するにとどめる。なぜならば、場合によっては、それは「子供」という概念の頑強さを証する一つの事例であるからだ。

本論文は主に次の三つのことを目的としている。すなわち、「*The Hunted* の物語内における「子供」に対する人々の眼差しを明らかにする」、「「子供」と「子供」像の奇妙な関係性を明らかにする」、それから、「「子供」である Tarrin の意識的な考えと無意識的な考えを分析し、そこに潜在する或る問題を浮かび上がらせる」、以上の三つである。これらの実態を明らかにすることによって、先述の論理的な混乱及びそれによってもたらされる悲劇の一例を提示することができるだろう。そしてそれによって、「子供」について語る際に本質主義の観点と構築主義の観点を截然と峻別する必要があること、及び、「子供」という概念への無意識的な依拠の陥穽を示すことができるだろう。

第1章 「子供」と「大人」の差異

The Hunted では、「子供」と「大人」は差異を有する二者として提示されている。まず、同作品において「子供」と「大人」の差異がどのようなものとして提示されているのかを明らかにする。

Deet が Tarrin に次のように言う。“[O]ne day you'll grow up and then you won't be worth anything. Youth's the only stuff that matters these days. And you know why? - Because it's in short supply” (1). Deet によれば、成長して若さを喪失すると、その人には価値がなくなるという。ここで特に注目したいのは、「成長すること」と「若さを喪失すること」が同一視されている点だ。同作品では、「成長すること」、「若さの喪失」、「子供」でなくなること、「大人」になること、これらが同一視されている。そして「子供」から「大人」への変化は時間の経過と共に、いわば自然に達成されるとされている。「子供」から「大人」になるための条件が特別に示されることはない。誰でも無条件に成長し、若さを喪失し、「子供」でなくなって「大人」になってしまうのである。この不可抗力的に立ち至る事態が、この物語において核心的な話題となっている。そしてこの変化を止める唯一の方法が、手術を受けて PP になることなのである。Deet は別の箇所でも「子供」でなくなると価値を失うということを述べている。“You're going to be just one more nobody in a world of nobodies. The world's full of nobodies [...]” (64). ここでは、「子供」でなくなると「誰でもない者 (nobody)」になるという、或る種強烈な見解が提示されている。Deet だけでなく、語り手も同様のことを述べる。

The early months and years of childhood were the worst in terms of risk and vulnerability, for they were also when the child was most valuable. Then the commercial worth of a child steadily diminished with age - just as Tarrin's own value was gradually diminishing - until one day you were grown up.

And then you weren't worth a damn thing to anybody. (63)

以上のように、「子供」がいかに価値を持った存在であるかが示される。

その一方で、「大人」は「大人」で、「子供」にはない価値を持っている。Deet が、PP になった場合について Tarrin に次のように述べる。“Sure, you'll miss out on a few things - the things that grown-ups do” (3). Deet によれば、「大人」でなければできないことがあるという。実際に物語内で、「大人」が行う行為として認識されていることを「子供」が行うのは奇異であるという見解が提示される。このような見解は「子供」の行動を制限しうる。これに関しては本論文の第2章で詳述する。

このように、「子供」と「大人」は、その貴重さや、それぞれにできることとできないことがあるという点で明確に差異化されている。そのような中で、PP は「子供」と「大人」をめぐる或るずれを含み持っている。

PP について、語り手が次のように述べる。

And some of them [PPs] were pretty good too. And so they should be. They had years and years of experience behind them, of acting the child, of keeping the customer satisfied. [...] They laughed, they cried, they could be cute and sweet and cuddly to order. [...]

Yes, they could do all that. They could act the child better than anyone, but they had long since ceased to be children. They had the faces and the bodies of children, right enough, but they had the minds and souls of some strange new species that had never before existed in the world. (33-34)

ここで、PPは「子供」であって「子供」でないと説明されている。より厳密に言えば、「顔と体」は「子供」でありながら、その一方で「心と魂」は「子供」ではない「新たな種 (new species)」と見做されている。或る人が「子供」であるのか否かが決定される際に、いわば内面と外面において、それぞれ別個に判断基準が設けられている。そしてPPは、その外面は「子供」であるが、その一方でその内面は「子供」ではないと見做されている。PPが含み持っているこのずれが、さまざまな問題を生起させる。

Tarrinが或る時に二人組に出会う。それは、Charlieという名前のPPと、語り手によって「金髪の男の人 (blond man)」と呼ばれる人物の二人である。Charlieが四十八歳であり、「金髪の男の人」がCharlieよりも年下であることが示される。この二人の間で主導権争いが生じる。「金髪の男の人」がCharlieに次のように述べる。“Partners or not, older than me or not, you ain’t so big I can’t take you over my knee and give you a good hiding” (6). ここで、年齢と体の大きさが問題にされている。これを聞いたCharlieは彼を睨み付け、次のように答える。“You can try it, [...] [a]nd you may do it. But you’ll only do it once” (6). この二人のやり取りの後で、語り手が次のように述べる。“The blond man went on trying to look in charge, but he didn’t really seem it any more” (6). この出来事では、「PPであること」と「年齢」と「体の大きさ」の三点が問題化されている。PPであるCharlieは体が小さいために「金髪の男の人」から見^{みくび}縊られる。ここで重要なのは、最終的に二人の立場はどうかやら逆転したようであるが、初めに「金髪の男の人」がCharlieとの関係性を決定する際に、その判断基準として体の大きさを最も高位に置いているということだ。

同様の事例が他にも見受けられる。PPであるDavina嬢がタクシーを呼び止め、彼女とTarrinがそのタクシーに乗り込もうとすると、見知らぬ一人の男の人がそのタクシーを横取りしようとする。そしてDavina嬢とその男の人は口論を始める。

その男の人が “Now look here, little girl, I don’t know what you’re doing out at this time of night—” (255) と言ってきたのに対して、Davina 嬢は次のように応じる。“Don’t you little girl me, you great bozo! [...] I’m old enough to be your mother and if I was I’d drum some manners into you for taking other people’s taxis! So out of my way!” (255)¹. Davina 嬢はこの言葉をその男の人に投げつけ、Tarrin と共にそのタクシーに乗り込む。タクシーに乗り込んだ後で、Davina 嬢が Tarrin に次のように述べる。“[...] I just hate being small sometimes and never getting taken seriously” (256). Davina 嬢のこの発言からも、PP が体が小さいがために見縊られていることが了解される。このように、この出来事でも年齢と体の大きさが問題化されている。より厳密に言えば、年齢に見合わない体の大きさという、年齢と体の大きさのずれが問題の原因となっている。

上述の Charlie と Davina 嬢に起こった出来事は、PP の内面と外面の不一致に起因して生じている。この不一致は、「子供」は体が小さい」という既存の「子供」の観念と「大人」は体が大きい」という既存の「大人」の観念から生じる両者の差異に基づくことによって認識される。さらにこれらの観念に依拠して、「子供」の体の大きさである PP に対してとる態度が決定されている。これらの事例では、いずれも認識対象の人物の在り方を判断する際に体の大きさが第一の拠り所となっている。そして、Charlie に相対した「金髪の男の人」と Davina 嬢に相対した男の人は、それぞれ Charlie あるいは Davina 嬢に対して、彼らが「子供」に接する時にとるであろうような態度をとっている。このような認識を行う時、その対象を見ている人は対象そのものを見ていない。それらの人々は対象そのものを見ずに、自らが保持している観念を見ている。Charlie と行動を共にする「金髪の男の人」は Charlie ではなく「子供」という観念を見ており、同様に Davina 嬢に食って掛かった男の人は Davina 嬢ではなく「子供」という観念を見ていた、そして、その観念と Charlie や Davina 嬢の実像にずれがあったために、彼らは痛い目にあうことになったのである。次に、「子供」や「大人」、それから PP に関する Tarrin の考えについて考察を行う。

Tarrin は自分自身のことを「子供」であると考えており、やがては「大人」になりたいと考えている。Tarrin は「大人」になりたいため、Deet に PP になることを要求されるが、それを断る。

‘I might not want to be a kid forever, Deet. I might want to grow up.’

‘What for?’

‘To be big. To do things – you know. Just to . . . be me . . . become who I am.’ (68-69)

Tarrin は「大人」になりたいという思いを物語の中で一貫して抱いており、彼に PP になってほしいという Deet の要求と対立して物語に終始緊張が生まれている。では、Tarrin はどのような意味において成長して「大人」になりたいと考えているのか。次の Tarrin の発言では、彼が、PP であってもいわば内面においては「大人」になれる、なってしまう、と考えていることが示されている。“I just . . . might . . . rather . . . I don't want to be a child all my life, in a child's body, but with some sort of grown-up's mind” (69). したがって、Tarrin の望みは内面と外面の両方において「大人」になりたいというものだと考えられる。とはいえ、Tarrin の「大人」になりたい理由は漠然としており、明確な理由は持っていないようだ。そのことが示されているのが、次の Tarrin と Deet のやり取りである。

'I don't want to be a boy forever, Deet . . . I want to grow up.'

'You want to grow up? What for?'

'I just do.'

'And do what?'

'I don't know.' (217-218)

明確な理由はなくても、Tarrin が「子供」から「大人」になりたいという強い思いを持っていることは明白だ。「子供」から「大人」になりたいということは、両者に差異があると考えていることを示唆する。付言しておく、同作品からは、この Tarrin の「大人」になりたいという思いや PP が置かれている状況等、物語の展開を通して、「大人」になることを推奨するような意向が読み取れる。さらに述べると、人々が抗老化薬や PP インプラントといった医療技術を利用する様子を描き出すことによって、帰謬法的に、それらを使用せずに自然に年を取ることを推奨するような意向も読み取れる。

次に、Tarrin が有する PP に関する考えについて考察を行う。Tarrin が PP になる手術を受けた人について次のように考える。“He briefly wondered what it must be like to be fifty-five years old yet still a child, never to have aged, never to have grown. What was it like for a girl never to become a woman? For a boy never to become a man?” (12). ここでは、「子供」であることと「年を取らないこと」、それから「成長しないこと」が一緒くたにされている。しかし後に、これらの諸要素の関係性にずれが生じる。後に、Tarrin は Deet から PP になるように要求された時に次のように述べる。

Deet . . . I don't want to be a child for the rest of my life . . . I don't want to be a boy forever and ever. Always having to climb trees and drink lemonade and do what people expect boys to do because they read it once in a book somewhere . . . always to have to act like that, every afternoon, always and always, always moving on from town to town, always looking like a boy on the outside, while inside I get older and older— (218)

先の引用箇所と異なり、この発言では「子供」であることと「年を取らないこと」が一緒くたにされていない。むしろ、年を取るにもかかわらず「子供」の姿のままであるというずれが問題化されている。Tarrin が PP の年齢と見た目のずれに対して不自然さを感じる事例は他にも見受けられる。Tarrin が PP を見て次のように考える。“They were men and women; old men and old women in some cases. They were professional children, entertainers, people who sold an image of childhood to those who could have no families of their own. They were adults in children's bodies” (246). ここでも PP が含み持っている内面と外面のずれが問題化されている。Tarrin は人間のいわば内面と外面においてそれぞれ「子供」である状態と「大人」である状態があると考えており、そして PP にはこの内面の状態と外面の状態にずれがあると考えている。このような認識は、既存の「子供」の観念及び既存の「大人」の観念から生じる。これらの箇所は、Tarrin が「子供」と「大人」のそれぞれの「在り方」及び「在るべき姿」の観念を所持し、その観念に囚われているという重要な事実を示している。そしてそのような観念と実際の「在る姿」のずれが、「子供」と「大人」、それから PP をめぐる種々の問題を生起させる。

以上のように、同作品において、「子供」と「大人」は異なる存在として提示されている。両者は内面と外面の両方が異なっているとされている。しかしその差異の具体的な内容——とりわけ内面の——に関しては明確には提示されず、漠然としている。PP と、Tarrin のような PP でない「子供」は、内面は異なっているとされている一方で、外面はどちらも「子供」の姿をしているという点で共通しているとされている。しかし実は、PP と Tarrin は姿以外にも共通点を有している。この点から、「子供」と「子供」像の錯綜した関係性が立ち現れる。次に、この「子供」と「子供」像の関係性について論じる。

第2章 「子供」と「子供」像に生じる逆転現象

先に示したように、PPは「子供」を演じる。しかし、PPでないTarrinも、時にPPと同様に「子供」を演じることがある。その様子が明確に示されているのが、木登りの失敗の偽装だ。先に述べたように、Tarrinは人に貸し出される。Tarrinは、Davey夫人という人物に貸し出された際に、彼女に見られている状況で木登りを行う。Tarrinは、木から降りる際にわざと転んでみせる。しかし、彼は無傷だ。その時に、Tarrinは次のように考える。“He [Tarrin] knew, despite her protests of concern, that she would be secretly disappointed to find him unharmed” (36). このように考えたTarrinは、Davey夫人に気付かれないように地面から石を拾い、その石で自分の腕に傷をつける。Davey夫人は、傷ついたTarrinに手当てをすることを楽しむ。契約の時間が終わり、DeetがTarrinを迎えに来た時に、二人の間でこの傷について問答が交わされる。DeetはTarrinの傷の経緯を悟り、語り手が次のように述べる。“Deet looked pleased and satisfied. He gave Tarrin a sly nod and an all-but-imperceptible wink, like they were both in something together and were pulling the wool nicely over Mrs Davey’s eyes. He’d got cut so she could mother him. Professional stuff” (45). このように、Tarrinも顧客が抱いている「子供」像を推測し、そして顧客の希望を推察し、「子供」を演じている。Tarrinはこれを自覚的に行っている。したがって、この点においてTarrinとPPは共通点を有している。

しかし、Tarrinは時に「子供」を演じることを嫌がる。「子供」であるはずのTarrinの実像と、人々が持っている「子供」像にずれがあるためだ。そのため、「子供」であるはずのTarrinは、仕事で顧客と交流する際に本当の自分を抑え、顧客が持つ「子供」像に合った「子供」を演じざるを得なくなる。先のDavey夫人は「男の子のことはわかっている」という趣旨のことを度々口にする(26, 36, 38, 43)が、それに対してTarrinは悲痛にも次のように思う。

No, Mrs Davey, you’re a good, kind woman, but you don’t know what boys are. [...] But you do not know what they are. [...] How complicated we know we are, how simple and straightforward we think everyone else to be. (43)

Tarrinは、相手をしっかりと見て、一人の人間が複雑であることを認識してほしいと望んでいる。「子供」を演じることに對するTarrinの思いが吐露されている箇所がある。Tarrinが、今日は五件の仕事が入っているとDeetから告げられた後に、次の

説明が加えられる。

Five. Tarrin's heart sank. It was too many. Each visit was only an hour, but it was still too many. Three Tarrin could manage without difficulty. But even four was hard. It was hard to smile, hard to be pleasant, hard to be, for sixty short minutes, the perfect child that somebody had never had, to fulfil the desires of a lifetime.

'I'm only a kid, Deet,' he had said to him once.

'That's why they want you,' Deet had answered.

'I mean, I'm bound to disappoint them. I can't be perfect, Deet. I don't know what they imagine kids are like, but I don't think it can be me.'

'You'll be OK, kid.'

'It's having to make them happy, Deet. It's so hard . . . to be what they want you to be all the time. I'm just a person, Deet. I get tired and fed up and ratty and . . . you know.' (83-84)

このように、Tarrin は、他人が持つ「子供」像に自らを適合させて「子供」を演じることに嫌気が差すことがある。

Tarrin は一度だけ「ありのままの自分である」と感じる体験をする。Tarrin は、PP になる手術を受けることを強要されたために Deet のもとから逃げ出す。Tarrin はその時に次のように感じる。

I was free. I was free. For a few brief hours I was free, Tarrin thought, both proud and sad. I was me, and I didn't belong to anyone. And I didn't have to pretend to be a child – because I *was* a child. I didn't have to be a child for an hour or a morning or an afternoon – I was me. Just me. For a little while, I was me. To be who you really were, it was the best thing in the world. (240)

ここから、「子供」像に適合させることを他人から期待されない時が、Tarrin が「ありのままの自分」でいられる時間であることが了解される。

Tarrin は、共にいるのが Deet である時には「子供」を演じる必要がないため、比較的「ありのままの自分」でいることができる。その証拠に、次のような一文がある。“At least with Deet he [Tarrin] could be himself. Once the day's work was over, he could be himself again” (161). その Deet と話している時に、Tarrin が鋭い

ことを言う。その Tarrin の発言に対して、Deet が次のように述べる。“You worry me, kid, [...] Sometimes you sound too grown up for your own good. You'd better not go talking to the customers like this when you're out on the hour” (67-68). ここでは、少なくとも Deet と Tarrin から見て、Tarrin の内面における「子供らしさ」は消え去っている。したがって、ここでの Tarrin の内面は「大人」のものだ。Deet はこの点を心配している。この出来事はきわめて示唆的であるため、特筆に値する。この出来事から、「子供」を演じることだけでなく、そもそも「子供」であることも「子供」像に依拠しているという事実が浮かび上がってくる。以下、このことについて説明を行う。

「子供」であるはずの Tarrin は、上述のように「子供らしくない」と受け取られる発言を行う。そのため、Tarrin の内面はもはや実質的に「子供」ではない。したがって、これ以降彼を純粋に「子供」と見做すことはできない。しかし、これ以後にも Tarrin は「子供」であると見做され続ける。なぜ、「子供」から外れる要素を持つ Tarrin が、これ以後にも「子供」であると見做されうるのか。また、「子供」であるはずの Tarrin が「子供」という概念の定義から外れているため、厳密には「子供」という概念は機能不全に陥るはずだ。「子供」という概念の定義から外れる「子供」がいるにもかかわらず、それでも「子供」という概念が機能しうる根拠はどこにあるのか。これらを成り立たせるには、二つの方法が考えられる。一つは、「子供」とされる人が持つ、既存の「子供」像から外れる性質を新たに「子供」像に組み入れ、「子供」像を更新させる」という方法であり、もう一つは、「既存の「子供」像」を絶対的な基準にして、「子供」とされる人の「子供らしくない」要素（つまり「子供」像から外れる要素）を抑圧、あるいは排除する」という方法だ。なお、「抑圧」は対象を保持していることを含意し、「排除」は対象を捨て去ることを含意する。ここではどちらであるのか明確でないため、両者を併記している。

上述の出来事では、「子供」である Tarrin が新たな「子供」像を生み出すのではなく、Tarrin の性質のうち既存の「子供」像から外れる要素が「子供らしくないもの」として抑圧、あるいは排除されている。つまり、「既存の「子供」像」を絶対的な基準にして、「子供」とされる人の「子供らしくない」要素を抑圧、あるいは排除する」という方法が採用されている。したがってここでは、「子供」とされる人の実際の在り方よりも「子供」像が優位にある。「子供」像は「子供」という存在から生じるはずであるが、その「子供」像が確立して広く深く浸透することによって、逆に「子供」像が「子供」の在り方や「在るべき姿」を決定するに至っている。この出来事はそのような過程、いわば逆転現象を示している。Tarrin の「子供」としての在り方から明らかになるのは、人々の言う「子供」

というものが、実は「子供」像」といういわば虚構に依拠しており、Tarrinのような「子供」とされている人々の実像とは異なるということだ。最初の段階では概して「子供」像に近い「子供」らしい人物が「子供」として認識されるが、次の段階において、その人物の実像が既存の「子供」像から外れていた場合、その実像のうち既存の「子供」像から外れている要素は二つの位置で抑圧されたり排除されたりすることになる。その位置の一つは、TarrinがDavey夫人に対して嘆いていた(43)ように、「子供」を認識する側にある。その人は「子供」とされる人物の「子供」らしくない要素を認識しないように、認識の過程においてその要素を抑圧したり排除したりするのである。別の言い方をすれば、そのような人々は「子供」と見做される人物に「在る姿」ではなく自らが持つ「子供」像を見る、ということである。もう一つの位置は、TarrinがDeetから発言に気を付けるようにと注意された(67-68)ように、「子供」として認識される側にある。その人は自分の「子供」らしくない要素が他人に認識されないように、自らその要素を抑圧したり排除したりするのである。

語り手やTarrinはPPに対して否定的な態度を示すのだが、その理由が作中で明確に示されることはない。この理由も、上述の「子供」と「子供」像の関係性によって説明することができる。PPは、先に示したように、語り手によれば「新たな種」だ。PPがそのように認識されるのは、対象となる人物を認識する際に、その対象をどのように認識するのかを決定するための基準が確固としてあり——それは顕在的な場合もあれば、潜在的な場合もある——、その基準が既存の「子供」像や「大人」像に依拠しているためである。そしてそこには、「子供」か「大人」、そのどちらかでなければならないという前提が潜在している。PPを「子供」か「大人」のいずれかに分類しようとした場合、PPは内面と外面に不一致があるため、既存の「子供」像にも「大人」像にも当て嵌まらない。そのためPPは、Tarrinの「子供」らしくない要素と同様に、PPそれ自体が抑圧あるいは排除されることになる。内面の状態と外面の状態にずれがあるPPや、Tarrinの「子供」らしくない性質といった、いわば安定した状態を揺動させる要素は忌避されるのである。

Tarrinの購入——貸し出しではなく——を検討しているHartinger夫妻という人物が登場する。Hartinger夫人がTarrinに次のように述べる。“We don't require you to do anything at the moment, thank you, Tarrin. At least nothing other than to be yourself” (156). そしてHartinger夫人は「子供」を演じている「子供」ではなく、ありのままの「子供」を欲しているという態度を示す。しかし、Hartinger夫妻は実は「子供」を選びすぐっているという事実がすぐに明らかとなる(158-159)。彼らはありのままの「子供」のうち、自らが持つ「子供」像に可能な限り近い「子供」

を探し求めているのである。この Hartinger 夫妻の態度から、「子供」像が「子供」とされる人の実際の在り方よりも圧倒的に優位にある様子が窺える。

このように、さまざまな面において人々は「子供」像に囚われている。既存の「子供」像は容易には更新されず、頑強に残存する。「子供」像がいかに頑強なものであるかを証する事例が作中にあるので、次にそれらについて考察を行う。

この物語に登場する人々は、「子供」の数が少なく、PP が存在することがごく普通の状態である時代に生まれ、その中で生きてきた。それにもかかわらず、人々は、PP が存在しなかった頃の状態を有している。例えば、先に言及した PP を見縊る人々。彼らは、「子供」の姿をした人物が PP である可能性があるにもかかわらず、そのことを考慮しない。Charlie と行動を共にする「金髪の男の人」に至っては、Charlie が PP であることを知っているにもかかわらず、先述のような態度をとる。「子供」の姿をしている人物に対しては、無条件に相手が「子供」であると決めつけ、「子供」に接するように接する。このような事態は、PP が存在していなかった頃の「子供」像が根強く残存していることを示唆する。(なお、これを作者の不注意による不整合と捉えることもできる。) そもそも、「子供」に接する時の態度が特定のものに決定されているということが、人々が既存の「子供」像に全面的に依拠しているという事実を示している。というのも、「子供」に接する時の態度は既存の「子供」像に基づいて判断され、決定されるからだ。

Tarrin も同様の感覚を有している。例えば、PP 達が集まって「大人」が行うと考えられていることを行っている様子が、Tarrin には作り物のよう (contrived) で非現実的 (unreal) に見える場面がある (251)。ここでは、「子供」の姿をした人物が「大人」が行うようなことをするのは奇異である、と、見た目が行動を規定する様子が描出されている。Tarrin がこのように感じるのは、「子供」像に関して、彼が PP が存在しなかった頃の状態を有しているからだ。

次の箇所も、従来の「子供」像が頑強に残存していることを示唆する。

[H]e [Tarrin] went and put the television on low and watched the children's cartoons. There were hardly any children left to watch them, but the television companies went on putting out repeats regardless. Adults watched them instead - in the same way that adults could be seen playing on the swings in the park or making themselves sick and dizzy on the roundabout, spinning recklessly round, sometimes even flying off and hurting themselves, scraping their elbows and knees.

*When I was a child,
I spake as a child,
I understood as a child, I thought as a child:
but when I became a man, I put away childish things.*

Well, that may have been true once, back in those Gideon Bible days, but it was true no longer. (176-177)

「子供」と見做される人々がかつて行っていた諸々のことを、今では「大人」と見做される人々が行っているという、新たに立ち至った状況が提示されている。しかし、依然としてそれらの行動は「[[子供]らしい]もの」として認識されていることが暗に示されており、特定の行動とそれを行う特定の人々の結び付きが更新されていない。したがってこの箇所も、従来の「[[子供]像」が根強く残存しているという事実を示している。この中で使用されている“the children’s cartoons”という表現も同様のことを示唆する。ところで、この引用箇所よりも前に、少子化の影響で特定の産業が壊滅したという説明がなされる。それは次のものだ。“The lack of children meant that thousands of people had been left without occupation. So many businesses had closed [...]” (85). この直後で、「子供」達のために存在していた数々の産業が衰退していった様子が語られる (85-86)。これは先程の引用箇所の記述と齟齬をきたしているが、これに関しては齟齬があることを指摘するにとどめる。

このように、「[[子供]像」は頑強に残存し、人々はそれに囚われる。そしてこれまで見てきたように、たいていの場合、Tarrin は「子供」、あるいは「男の子」としてしか見てもらえない。「Tarrin」という一人の個人として見てもらえないのである。「[[子供]である」という要素は Tarrin のさまざまな要素のうちの一つにすぎないが、しかし、人々は Tarrin に「子供」という要素をしか見ないのである。このことが、物語の終盤で Tarrin に悲劇的な事態をもたらす。

物語の終盤で、皮肉にも Tarrin が「[[子供]であること」を内化できていない様子が示される。Tarrin は、まず間違いなく実の家族であろうと思われる人々と再会する。そして母親と出会った時に、次のような場面が展開される。

[...] [S]he [Tarrin’s mother] put her arms out, the way a parent would do to a child, a small child, running towards them, ready to scoop that child up and swing it in the air.

Only what if the child swerved away, didn’t run, didn’t come, turned and

fled? (279)

Tarrin は一般的に「子供」が行うとされる行動を、冷静に、客観的に分析している。Tarrin のこのような態度の原因は、彼がしばしば「子供」を演じてきたことにあることが、少し後に示される。Tarrin の兄弟である Ed がサッカー用の球を蹴っている様子を、Tarrin が眺める。その時に Ed が Tarrin に “You want to play?” と尋ねると、Tarrin は “I don’t know how . . . [...] I don’t know how.” と答える (280)。そして語り手が次のように述べる。 “And that was it. He didn’t. He had no idea. He didn’t know how. Not really. Except for money, except as work, except to do what was expected. And maybe it was too late to learn” (281). Tarrin は実の家族と再会できれば自分が誰であるのか知ることができると思っていた。Tarrin は Davina 嬢のもとから逃げ出す際に、彼女に置き手紙を書く。Tarrin はその手紙に次のように書いている。 “I wish I could be the son you are looking for but I cannot. I have to be me, just me, though in many ways I don’t even know who that is – and that is what I have to try to find. I’m looking for someone too, you see. Maybe a memory, maybe a dream, I don’t know” (263). ここで言われている “someone” とは、Tarrin の実の家族のことだ。しかし先に示したように、Tarrin は実の家族と考えられる人々と再会しても戸惑うことになる。Tarrin は実の家族と再会しても、自分が誰であるのか、どう在るべきであるのかわからないのである。Tarrin は自分にとるべき行動さえもわからなくなってしまった。Tarrin が「ありのままにいたい」と思ってきたことを先に示したが、「子供」という概念がどこまでも Tarrin に付き纏い、Tarrin に「ありのまま」でいることを許さない。その一方で、「在るべき姿」は瓦解し、そのために Tarrin は戸惑う。「在るべき姿」が瓦解したのは、これまでに経験したことがない新たな状況に身を置いたためだ。演じた「子供」でない「子供」はどう在るべきなのか、Tarrin にはわからないのである。二つ前の引用部分に “And maybe it was too late to learn” とあるが、まさしく、「子供」であることは学ぶべきことなのである。逆に言えば、「子供」像は人の在り方を決定するための拠り所となるものなのである。

この Tarrin に起こった悲劇的な出来事、それから先述の Charlie と Davina 嬢という二人の PP に起こった悲劇的な出来事は、「子供」という概念の頑強さ及び「子供」という概念への無意識的な依拠が原因となって生じている。しかしこの「子供」をめぐる機構の中で、Tarrin や Charlie、Davina 嬢は単なる受難者というわけではない。なぜならば、彼らは時に既存の「子供」像に抵抗することもあるが、その一方で、彼らは人々が保持している「子供」像に合致する「子供」を演じることによって、悲劇的な出来事の元凶となる「子供」像を自ら再生産してもしるから

だ。とはいえ、彼らは生きてゆくためにそうせざるを得ない状況にある。この彼らが置かれている状況から、「子供」という概念をめぐる、抵抗することが困難な循環的な構造の存在が認められる。Tarrin に関しては、別の理由からも、彼を単なる受難者と言ってしまうことはできない。次に、Tarrin が抱えている或る矛盾について考察を行う。

第3章 Tarrin が抱える矛盾

先に示したように、Tarrin は人々が保持する「子供」像に合致する「子供」を演じることを嫌がり、一人の人間が複雑であることを認識してほしいと望んでいる。しかしそのような Tarrin も、実は「子供」という概念に囚われ、人間の在り方を決定する際に「子供」という概念を優位に置いている。次の二つの点から、その様子が認められる。一つは、「Tarrin が自分自身を「子供」であると考えている点」、もう一つは、「Tarrin が他人に「子供」であることを求める点」、以上の二つである。以下、これらについて考察を行う。

まず、Tarrin が自分自身を「子供」であると考えている点について述べる。次の Deet と Tarrin の会話から、Tarrin が自分は「子供」であると考えていることが了解される。

'Sometimes I think, kid, that the sooner you get the PP, the better it'll be for both of us. Why, in five or ten years, you could learn to be a real professional kid.'

'I am a kid, Deet. I'm a child already.'

'I mean a proper one.'

'I am a proper one. I'm more proper than they [PPs] are.'

'I'm talking about expectations, kid. [...]' (68)

Tarrin が「子供らしくない」と受け取られる発言を行う事例に先に言及したが、この会話はその後に続けられるものである。ここでは、Tarrin が自らを「子供」であると考えていることが示されている。より厳密に述べると、Tarrin は、他人が規定する「子供」ではないが、Tarrin 自身が規定する「子供」ではあると考えている。また、先に示したように、Tarrin は「大人」になりたいと思っている。「大人」になりたいということは、現時点では「子供」であると考えていることを示唆する。

Tarrin があえて自らを「子供」という範疇に位置づけるこの行為は、彼が「子供」という概念に囚われていることを示唆する。付言しておく、上記の Tarrin と Deet の会話から、「子供」と「子供」像のずれも認められる。というのも、Tarrin 自身が自分は「子供」と主張しているにもかかわらず、それに対して Deet は「子供」像に合う「子供」であれと Tarrin に言っているからである。

次に、Tarrin が他人に「子供」であること」を求める点について述べる。或る時に Tarrin が次のように考える。“What he [Tarrin] wanted was to meet another child, one to talk to, one to play with, but he hadn't seen anyone his age for weeks now” (1). 次の箇所も同様のことを示している。“Another man, with a child beside him, was coming towards them [Deet and Tarrin]. Tarrin's heart leaped. The boy was the same as him – his age, his height. It was weeks now since he'd played with anyone, even talked with, even seen, anyone like himself” (4). このように、Tarrin は他人に「子供」であること」を求めている。この点において、Tarrin は彼に「子供」であること」を求める人々と変わらない。これらの箇所でも、Tarrin が「子供」という概念に囚われている様子が示されている。

以上のように、Tarrin は人間の複雑さを主張しながらも、自らを「子供」と考えており、それだけでなく他人に「子供」であること」を求めるとさえする。この二つの点から、Tarrin も潜在的に「子供」という概念に囚われていることが理解される。本論文の「はじめに」で、「子供」である Tarrin の意識的な考えと無意識的な考えを分析し、そこに潜在する或る問題を浮かび上がらせる」、と述べた。「潜在する或る問題」とは、Tarrin が抱えているこの矛盾だ。この矛盾から、この物語内において「子供」という概念がいかに強い力を持ったものであるかが了解される。

一つ述べておかなければならないことがある。一度、Tarrin は「子供」の中でも特定の「子供」を限定する。彼は同じ状況にいる同じ年齢の「子供」の友人が欲しいと思うのである。この Tarrin の望みは次のように説明される。“More than anything he [Tarrin] wanted a friend, a friend of his own age. Not a PP. Not a pretend boy or a pretend girl, with sixty years of living hiding behind a mask of childhood, but a real live companion of his own age, with his own uncertainties, fears and feelings. Someone who would understand” (207). この時には Tarrin は「子供」を総体化していない。

おわりに

The Hunted の物語における「子供」をめぐるあらゆる問題、例えば「子供」であること」や「子供」を演じること」に対する Tarrin の戸惑い等は、「子供」という概念の虚構性とその頑強さに端を発していると結論づけることができる。そして、少なくともこの作品においては、「子供」という概念は人間の在り方を決定する力を持っており、その力は「暴力的な」と形容しても過言ではないほどのものであることが明らかとなった。

「子供」は「子供」という概念があって初めて存在することができる。そしてこれまでの考察で明らかにしたように、さまざまな意味において「子供」は「子供」像に依拠して存在している。したがって、次のように言うことができるだろう。すなわち、いわゆる「実在の「子供」」というものは、常に既に「子供」像である、と。このような「子供」と「子供」像をめぐる論理的な混乱はこの作品にのみ認められる事象ではない。これは「子供」に関わるあらゆる事柄に内在している問題だ。したがって、この問題は児童文学そのものにも内在している。児童文学は「子供」を必要とするため、誰かを「子供」にせざるを得ない。そのため、児童文学に携わる人々は特定の人（あるいは人々）を「子供」にしていると考えられる。*The Hunted* は、「子供」という語がその指示対象を探し出し、そこに当て嵌まる可能性のある人々を包含し、その人々に独特の価値を持たせるという、児童文学が持たざるを得ない機制を類比的に提示している。児童文学作品が「子供」を登場させれば、必然的に「子供」像を提示することになる。そうであるならば、児童文学は「子供」像を定着させ、「子供」の在り方を規定していると考えられる。いみじくも、Deet が次のように述べている。“It’s what people like, ma’am, [...] What they expect in some ways. They’ve read it in the old books that boys are always up to mischief and like to climb trees and get dirty” (157). 歴史上の事象において最も際立っている例は、Frances Eliza Hodgson Burnett (1849年生、1924年没) の *Little Lord Fauntleroy* (1886年刊) をめぐって生じた出来事であろう。この作品に感化された一部の人々は、主人公の Cedric が着ていたような服を「子供」達に着せ、「子供」達の髪型を Cedric のような髪型にしたのである。² 例えば、A. A. Milne (1882年生、1956年没) も親の嗜好からそのような恰好をさせられた「子供」達のうちの一人であった。彼が二人の兄と共にそのような恰好をさせられて写った写真が残っており、Brian Sibley の *Three Cheers for Pooh: A Celebration of the Best Bear in All the World* の11頁等で見ることができる。³ この *Little Lord Fauntleroy* の例は目に見える形で表面化しているが、その一

方で児童文学は潜在的な位置で「子供」像を提示し、定着させている可能性もある。したがって、児童文学がどのような「子供」像を提示しているのか、作品ごとに精査する必要がある。そしてその検証は本論文の「はじめに」で示した論理的な混乱を避けるために、徹底して構築主義に立脚し、論者が持つ「子供」観を慎重に排した上で厳密に行われなければならない。

The Hunted では、人々が、結果として残存している「子供」像を受容している様子が描出されている。その一方で、同作品では、新たな「子供」像が生成される過程や、既存の「子供」像が変化したり覆されたりする様子は描出されていない。そのような様子を描き出している作品もあるだろう。個々の作品で提示されている「子供」像を個別に精査し、それぞれを突き合わせてみる必要がある。そうすれば、児童文学には多様な「子供」像が併存していることが明らかとなるだろう。

上述の *Little Lord Fauntleroy* の事例が例証するように、児童文学における「子供」像は児童文学の領域内にとどまるものではなく、その領域外の「子供」像とも密接な関係を持っている。児童文学や或る児童文学作品が新たな「子供」像を産出して児童文学の領域内や領域外に影響を与える場合もあれば、或る児童文学作品が児童文学の領域外で産出された「子供」像を反映している場合もあり、また、或る児童文学作品が児童文学の領域内あるいは領域外で産出された既存の「子供」像の転覆を試みている場合もある。「子供」像は、児童文学の内外の相互作用によって循環的に構築される。このような関係性を究明する大きな枠組みの研究も必要だ。また、なぜ人々は「子供」をめぐる観念に執着するのか——あるいは囚われるのか——ということも、究明する必要がある。

(本論文は、2016年7月27日に開催された「第55回 白百合女子大学児童文化研究センター主催研究会 第5回 構成員研究発表会」で行った「*The Hunted* における“child”の諸相」と題する発表をもとにしている。)

註

- 1 “Don't you little girl me”は原文に従っている。
- 2 イギリスとアメリカ合衆国におけるこの恰好の流行に関して、坂井妙子が『アリスの服が着たい ヴィクトリア朝児童文学と子供服の誕生』において解説及び分析を行っている。

- 3 この恰好をさせられたことに関して A. A. Milne は自伝の *It's Too Late Now: The Autobiography of a Writer* で言及しており、次のように書いている。“He [Milne's father] conceded her [Milne's mother] the Little Lord Fauntleroy make-up (for I suppose it was she who liked it) and did his best to nullify its effect” (14). そしてこの後でこの恰好のことを “the wrong make-up” と言い表しつつ、この恰好が彼に与えた影響を、諧謔を交えながら説明している。

参考文献

- 坂井妙子 『アリスの服が着たい ヴィクトリア朝児童文学と子供服の誕生』 東京：勁草書房、2007年。
- Ariès, Philippe. *L'Enfant et la Vie Familiale sous l'Ancien Régime*. Paris: Éditions du Seuil, 1973.
- Burnett, Frances Hodgson. *Little Lord Fauntleroy*. London: Frederick Warne and Co., 1888.
- Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge, 1990.
- Milne, A. A. *It's Too Late Now: The Autobiography of a Writer*. London: Methuen, 1939.
- Nel, Philip and Lissa Paul, eds. *Keywords for Children's Literature*. New York: New York University Press, 2011.
- Reynolds, Kimberley. *Children's Literature: A Very Short Introduction*. New York: Oxford University Press, 2011.
- Shearer, Alex. *The Hunted*. London: Macmillan Children's Books, 2005.
- Sibley, Brian. *Three Cheers for Pooh: A Celebration of the Best Bear in All the World*. London: Methuen, 2001.